

6日目 8月22日(金)

百閒洞 4:10 — 5:20 大沢岳 — 5:50 山の家への近道の分岐 —
6:05 中盛丸山 — 7:25 兎岳 7:45 — 9:25 聖岳(前聖岳) 9:40 —
9:50 奥聖岳 10:05 — 10:15 前聖岳 10:25 — 11:05 小聖岳 —
11:45 薊畑分岐 — 12:10 聖平小屋(幕営)

(歩行時間: 7時間)

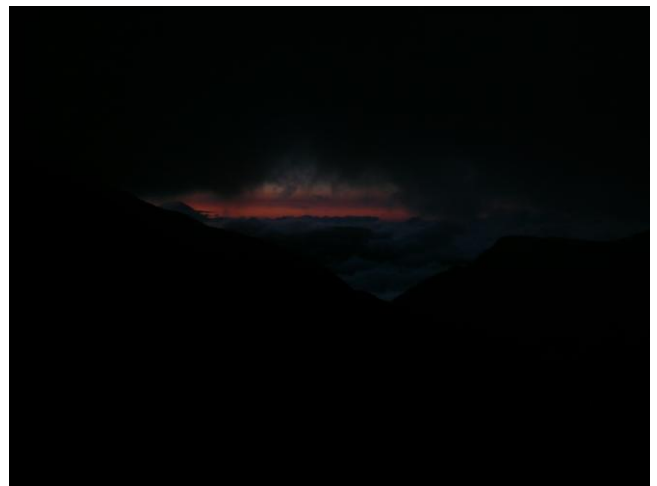
この日の楽しみは、大沢岳から聖岳に続くずっと標高 2700m以上の見晴らしの良い尾根歩きだった。

赤石避難小屋の管理人さんは、天気は期待できないと言っていたが・・・

前夜テントを張った場所は、標高 2819mの大沢岳に直登する道の登り口だった。テン場から少し上るとずっとハイ松帯の見晴らしの良い道が稜線までずっと続くのが下から見えていた。大沢岳の稜線から日の出を拝めることを期待して、2時過ぎに起床。ゆっくりと支度して、4時過ぎに出発した。

この日もガスが濃く、日の出の時刻が近付いてもなかなか明るくならず、ヘッドライトが必要だった。黙々と歩いていると、「グワッ」という鳴き声とともに、足元からハトほどの大きさの鳥が飛び立った。暗くてよく見えなかったが、雷鳥のオスのようだった。

一瞬、東の方角の雲が切れて、隙間から富士山が少しだけ見えたが、本当にほんの一瞬だった。すぐに雲がふさがって、周囲は再び濃い霧に覆われてしまった。どうやら、日の出も展望も期待できなさそうである。赤石の山頂も当然だめだっただろう。



わずかに見えた富士山(雲の切れ目の左端)

やがて、双耳峰の大沢岳の片方のピークに到着。ガスで展望がなく、山頂に石が積んであるだけで、面白いことは何もなかった。ここから聖岳へと続く稜線は、やはり西側が崩れ落ちて切り立っている。しばらく稜線を進むと、もうひとつのピークに到着。三角点はこちらにあった。ここも休まずに通過。しばらく行くと、広いところに出たのだが、踏み跡がたぐさんに分かれて、印もなく、濃霧で道がわかりにくいところがあつて、ちょっと時間を食ってしまった。

次第に空が明るくなってきた。ときどき東の方角だけ雲が切れて、赤石沢の谷の方が見えることもあった。

百閒洞からは、大沢岳に登らないで巻いてくる道があり、ほとんどの人はそちらを通るようで、その道と合流してしばらく行くと何人かを追い越した。



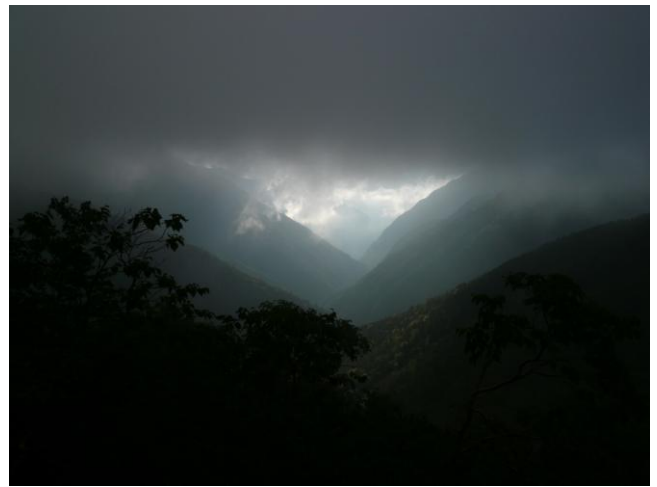
大沢岳の1つ目のピーク



濃霧の中、切り立った稜線を進む



西側が崩れて切れ落ちた稜線の道



重たい雲の隙間から、赤石沢の谷が見える



大沢岳の2つ目のピーク。標識が見える。

お椀を伏せたような中盛丸山を過ぎ、小兎岳を過ぎ、兎岳の急な登りにさしかかった。すると、急に薄日がさし始めて、ブロッケンが現れた。西側の上空から雲が切れて青空がのぞき、周囲の雲がどんどん下に流れ、上空の雲が消えていく。あっという間に雲がなくなり、一面の青空となった。ほんの数分間の出来事だった。今朝歩いてきた稜線はもちろん、赤石岳から荒沢岳、塩見岳、間ノ岳、そして仙丈ガ岳や甲斐駒ヶ岳まで見える。すでにこの日は展望をあきらめていたので、本当に嬉しかった。兎岳山頂では、この日初めて休憩を取り、眺めを楽しんだ。ただ、富士山は大きな聖岳が影になって見えない。そこで、再び雲が出る前に早く聖岳に登ってしまおうと思い、兎岳での休憩はほどほどにして、先に進むことにした。



兔岳直下の急な斜面を登っていると、急に青空が広がりだした。



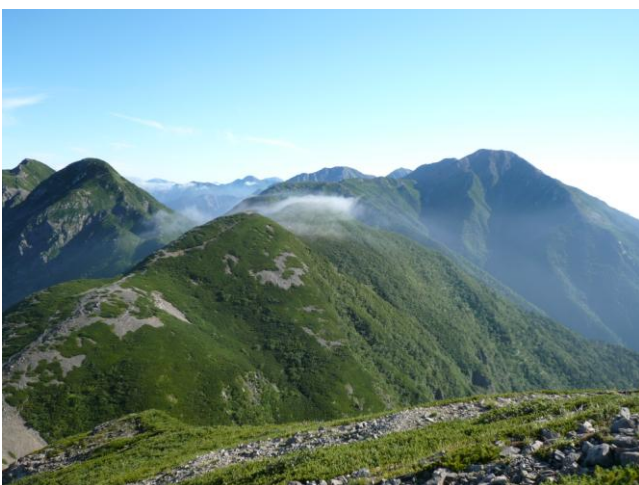
遠くに見えるのは、左から仙丈ガ岳、甲斐駒ヶ岳（ちょこっと見える山）、塩見岳、間ノ岳



あっという間に雲が消え、今朝歩いてきた稜線が姿を現した。左の双耳峰が大沢岳、右の丸い山が中盛丸山。わずか数分間の間に一気に晴れた。



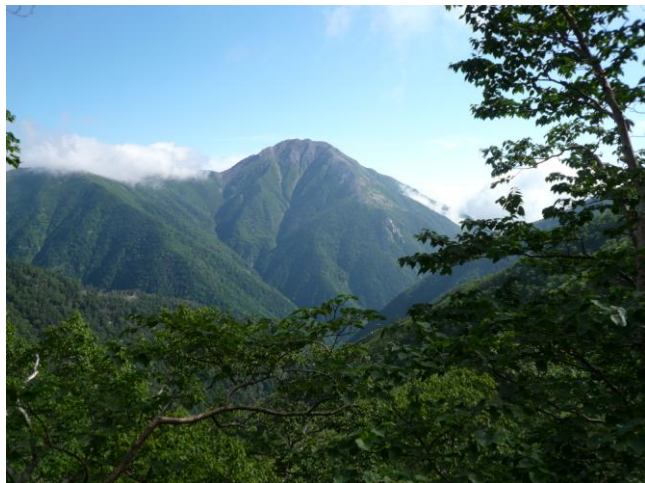
兔岳山頂（2818m）



すばらしい眺めが広がった。右は赤石岳。その左肩には荒川岳、遠くに塩見や仙丈ガ岳や甲斐駒ヶ岳まで見える。

兔岳から少し下ると、ぼろぼろになった非難小屋の脇を通り過ぎる。ここでテントを張る人もいるようだ（本当は幕営禁止。生態系保護のため、指定地以外は全面的に幕営禁止となっている。このような高山では、貴重な固有の植物が多い（北岳、荒川岳、聖岳と同じような 3000mほどの標高の山で、距離もそれほど離れていないが、咲いている花の種類は明らかに違うものがたくさんあった）ので、仕方がないと思う。途中すれ違った人の中には、キャンプ禁止のところでテントを張っている人が少なからずいたが…。緊急時は仕方がないとしても、指定地以外でテントを張らなくてすむように計画を立てるべきだと、私は思っている。

聖兎のコルからは急な登りとなる。左手に樹林の間から見える赤石岳が大きい。急登はわずかで、あとは頂上までなだらかな登りが続く。快調に進み、9時半に聖岳山頂に到着。期待通り、雲海の上に富士山が浮かんでいた。



樹林越しに見える端正な山容の赤石岳

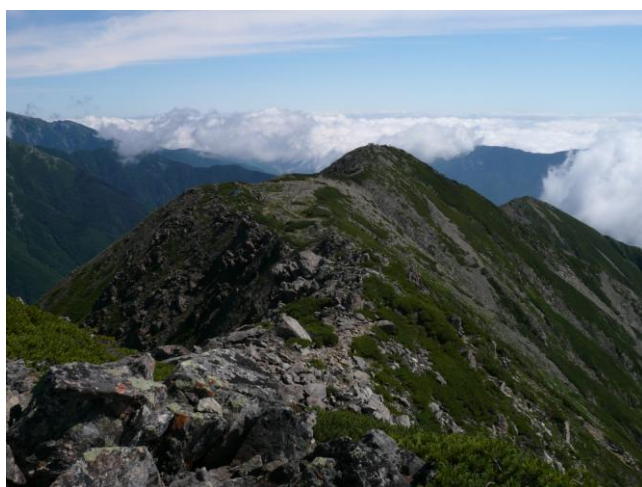


聖岳山頂へと続くなだらかな登り

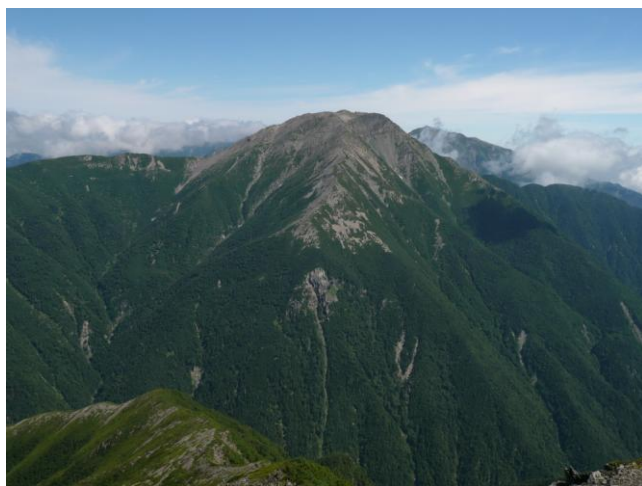


聖岳山頂と富士

聖岳山頂に着いたころには、仙丈ガ岳など遠くは雲に隠れてしまった。それでも、青空が広がり、眺めを楽しんでのんびりしたいところだったが、北から風が吹きつけてじっとしていると寒い。ちょっと休んだら、すぐ近くに見えている奥聖岳（2978m）を往復することにした。地図には 25 分と書いてあったが、10 分で到着。距離が少し近くなって、目の前の赤石岳がますます大きい。頂上には避難小屋が確認できる。百間洞の方を見ると、前夜テントを張った場所がはっきりとわかった。足元は少し切れ落ちて、その先に聖岳東尾根が続いている。



聖岳から奥聖へと続く道。中央が奥聖岳。



赤石岳



聖岳東尾根



ガレの先は、やせた稜線

ここでもじっとしていたら寒くなってきた。雲海も高くなって富士山が隠れてしまったので、引き返すことに。

聖岳山頂に戻って、この山行最後の 3000m 峰からの眺めをもう一度味わってから、聖平の方へ下った。

ガレの急斜面の下りで、7 月から縦走を続けてすでに参っていた膝に荷物の衝撃がこたえる。こんなところで痛めると後が厳しくなるので、滑らないようゆっくり下っていたら年配の夫婦に追い越されてしまった。ガレの急斜面を下りきると道はやせ尾根となるが、ここも西がひどく崩れていた。しばらくやせ尾根を下ると、道は平たんになり、ダケカンバの気持ちの良い樹林帯の中を進む。足元には、黄色のマルバタケブキや青のトリカブトの咲き乱れるお花畑が広がる。



西側が崩れて切れ落ちている



聖岳直下、ガレの急な下り



ダケカンバの樹林とお花畑

景色を楽しみながらのんびり歩いていると、少し前に私を追い抜いた 30 歳前後の若い単独行の関西弁の人が引き返して来た。オレンジ色の上着

を着ているので、すごく目立つ。この人は、樫島から千枚小屋経由で登ってきて、2日前に荒川小屋でカレーを食べているときに一緒になり、その時少し話をして顔を知っていた。小屋に素泊まりをして縦走しているらしい。前夜は百間洞山の家泊まったそう。この日は、聖平ではなく、先の茶臼小屋まで行ってしまいたいと言って、私を先ほどの下りで追い越して行った。

焦った表情で引き返して来たので、どうしたのかと聞いたら、道が違うと言う。西の聖光小屋・易老渡の方へ下る道との分岐で、聖平への道ではなく、間違えて聖光小屋の方へ行く道に入ったのではないのかと言うのだ。それだと、私も一緒に間違えていることになる。だいぶ前に、すぐ近くに聖平小屋が見えたので、もう分岐を通り過ぎてははずだ、そして小屋につかないということは、分岐で間違えたはずだと、彼は言う。

確かに、南アルプスは北アルプスに比べて、道が細いところが多く、分岐などで表示が不親切なこともあるが、ここは聖岳と光岳の2つの百名山を目指して大勢が押し掛ける道なのだ。聖岳から下ってくる間も、聖平小屋から日帰りで聖岳にピストンで登る多くの人たちとすれ違った。だから分岐の表示はしっかりしているはずだし、そのようなメジャールートの方岐を見落とすことなど、考えにくかった。

それに、私は（私だけでなく、まともな登山者なら皆そうだと思うが）地形の変化や方角でどの辺を歩いているのかを考えながら歩き、怪しかったら地図と、必要あればコンパスで確認するのだが、ここは地図を出す必要を感じないほど道も地形も分かりやすく、私の予想ではもう少しでやや急な下りとなって、10分もしないうちにその分岐に着くはずだった。

そこで、地図を出して私の考えを彼に説明したが、私も一緒に道を間違えていると言い張る。仕方がないので、コンパスを出して、いまいる稜線がちゃんと地図通り南北を向いていることや、これまで地形の変化、時間経過から、その分岐の数百m手前にいると考えるとすべてがうまく説明

できることを説明した。そうしたら、納得はしなかったようだが、それならもう少し進んで様子を見ると言って、先に行った。私は樹林とお花畑があまりにもきれいなので、そこで少しとまって景色を楽しんだり写真を撮ったりした。そして再びゆっくり歩き始めたら、その人、また引き返して来た。「やっぱりおかしい！」と言う。説明しても分からないなら仕方がないと思い、「納得いかないなら引き返して分岐を探してはいかがですか？私はこのまま進みますので。」と言ったら、「そうしますわ。あんたも、道まちごうととおもうんやけどなあ。」と言って、引き返して行った。どうやら、自分で地図を見て確認することすらしなかったようだ。

思った通り、ちょっと行くと下りとなり、5分ほど行くと分岐点が先に見えた。例の人、いったいどこまで進んでから引き返したのだろう…？

分岐点にカラフルなものが見えた。ガスがかかってよく分からない。テントのはずはないなあ、と思ったが、分岐点についてみたら、カバーをかけたザックがたくさん積んであったのだ。おそらく、手ぶらで先ほど聖岳の方へ登って行った団体さんのものなのだろう。

分岐からは、お花畑が続いたが、あちこちにあり立て看板の説明では、そのあたりはかつてニッコウキスゲのお花畑だったのが、鹿の食害で荒れてしまったとのことである。

やがて、茶臼岳・光岳方面への分岐になっているコルに達すると、小屋までは木道となる。ちょっと樹林をくぐり、12時過ぎ、小屋に到着。予定よりもかなり早い到着となった。

時間も早くてテン場まだガラガラだった。日差しはないが、ガスもないので、熊ノ平以来濡れて重くなったままだったテントや靴、靴下を干すことにした。そして、ちょうど腹が減っていたし、小屋ではインスタントラーメンが300円と安かったので、3人前作ってもらい、外のベンチで先客の夫婦とおしゃべりをしながらラーメンを食べていた。食べ終わるころ、ようやく先ほどの関西弁の人が着いた。「損したわ。あんたもうラーメ

ン食べ終わっているのに。小屋が見えたから、絶対におかしいと思うんだけどなあ。」

何日か前の報告で書いたが、この夏、南アルプスでノーマルなコースを歩いていたはずの登山者が4人も行方不明のままになっているという。地図も見ず（地図を読めないのかもしれないが）歩いている人がきっと多いのだろう。（道を聞かれることのなんと多いことか。）そのような人は中高年だけかと思っていたが若い人にもけっこう多いのかもしれない。「おかしいと思ったら、地図で確認しながら進まないといけないですよ」と、老婆心からその人に言ってみたが、はたして理解できたのかどうか…。



聖光小屋・易老渡方面との分岐（薊畑分岐）



聖平。左に木道を行くと小屋、まっすぐ進むと茶臼岳・光岳。



ずっと濡れたままだったテントや靴を干した

空気が乾いていて、干していたテントやフライ、靴、靴下は、2時間ほどですっかり乾いてくれた。翌日から低気圧が直撃して天気が悪くなりそうなので、どうせまた濡れるのは分かっていたが、朝に乾いた靴と靴下を履けるのは嬉しかった。

この日の午後は、本当にゆったりと過ごすことができた。下山後に試験のある外科・脳外科のプリントやテキストを持って上がったのだが、ただの重りにならなくて済んだのでよかった。

7日目 8月23日(土)

聖平 3:35 — 5:15 上河内岳の肩 — 上河内岳山頂往復(10分) —
5:25 上河内岳の肩 — 6:25 茶臼小屋方面分岐 — 6:40 茶臼岳 —
6:55 仁田池 — 7:20 希望峰 7:30 — 8:40 易老岳 — 9:20 三吉平 —
10:40 光小屋 11:10 — 11:20 光岳山頂 — 11:30 光小屋 12:00 —
13:00 百俣沢ノ頭 — 13:40 標高 2000m 地点 — 15:50 柴沢吊橋(光岳登山口)
— 15:55 柴沢小屋(小屋泊)

(歩行時間: 11 時間 10 分)

今回は低気圧がまともに東海地方にやってくるようで、この日も翌日も雨の予報だった。これまでは天候が不安定で雨の予報も多かったが、低気圧が日本海を通っていたので、南アルプスは何とか雨を免れていた。しかし、今回は本降りを覚悟していた。

この日は光岳までの予定で、地図のコースタイムでは 10 時間以上だった。アップダウンの少ない道なので、実際は 8 時間程度と見ていたが、距離が長いので早めに出発することにして、2 時に起床した。食事を済ませて外に出ると、重たい曇り空だが、ガスはかかっていない。うれしいことにテントは乾いたままである。昨日干しておいてよかった。たたむと、昨日までとは比べ物にならないくらい軽い。靴と靴下も久々に乾いていて、3 時半、気分よく出発。

稜線にあがると、背後に聖岳のシルエットが見えたが、見る見るうちに雲がどんどん低くなって聖岳を覆ってしまった。雲はさらに低くなり、とうとう私の歩いている周囲も雲の中となってしまった。ぱらぱら雨が降り出した。しばらくは真っ暗な中、樹林帯を歩く。やがてハイ松帯の開けた道となるが、この日は雲が厚く、なかなか明るくならない。

テントが乾いてザックが軽い。快調に進み、この日の最高地点、上河内岳(2803m)の肩へ予定

より 1 持間早く到着。10 分で山頂を往復して、先へ進む。



上河内岳 (2803m)

下っていくと、ツアーと思われる 15 人の中高年の団体さんとすれ違った。みなさん、すごく苦しそうに歩いていて、見ていて気の毒なくらいだった。



奇岩 竹内門

しばらく開けた道を進むと、大きな岩が道を挟んで門のように連なっているところがあった。竹内門というらしい。

さらにゆるい坂を下り続けると、次第に植物が多くなり、緑が濃くなってきた。やがて道は稜線を外れ、二重山稜の小さな谷間にある小さな草原へ。草むらのところどころが、亀の甲羅を並べたようにぼこぼこしているところがあった。これは亀甲状土と言って、土壤に含まれる水分が凍結と融解を繰り返してでできる周氷河地形らしい。



道は尾根を外れ小さな草原の方へ



道の左に見えるぼこぼこが亀甲状土

庭のようなこじんまりした草原を過ぎると、道は砂礫のゆるい上り坂となり、茶臼小屋・横窪沢小屋方面への分岐に到着。正面に見えるはずの茶臼岳は雲の中だった。ここで、雷鳥の親子を見かけたが、雛は親とほとんど同じくらいまで大きくなっていた。こんなに南まで雷鳥が生息しているのは意外だった。



茶臼小屋方面への分岐点付近

分岐からちょっと登ると、あっけなく茶臼岳山頂に到着。大きな岩がごろごろ転がっている山頂だった。休憩しようかと思ったが、風が冷たく、雲の中でまったく展望もなかったなので、先へ進むことに。



茶臼岳山頂付近は大岩がゴロゴロ



仁田池



茶臼岳山頂 (2604m)



希望峰

ちょっと下ると、左手に仁田池という小さな池が現れた。このあたりはところどころに湿地帯が広がり、木道になっているところもあった。

平坦な道を進み、少し登ると希望峰というちょっとしたピークに。ここで、この日始めて休憩を取った。ここまでアップダウンがほとんどなく、地図では 5 時間半のところ、3 時間半ほどで来ていて、疲れはまったくなかった。ここは仁田岳という見晴らしのよいピークへの分岐になっていて、ピークまで 20 分ということだったので、天気がよければ往復するつもりだったが、この天気ではピークを踏んで帰ってくるだけになるので、素通りすることにした。

この先は、シラビソの樹林帯の道となった。林床にはシダが密生し、霧に煙る原生林はいかにも南アルプス南部という山深い雰囲気、景色を味わいながらのんびりと歩いた。このような山は、かえって天気の悪いほうが良いと思う。

1 時間ほど歩くと、易老岳というちょっとしたピークに到着。ここは、西側の易老渡登山口への分岐となっている。易老渡からのこの道が光岳への最短コースとなっていて、登山口には車を止められることから、このコースを利用する人は結構多いようである。山頂にザックが 2 つ置いてあったが、おそらく易老渡から登ってきて、ここに荷物を置いて空身で光岳の山頂を往復し、茶臼岳の方へ向かうのだろう。

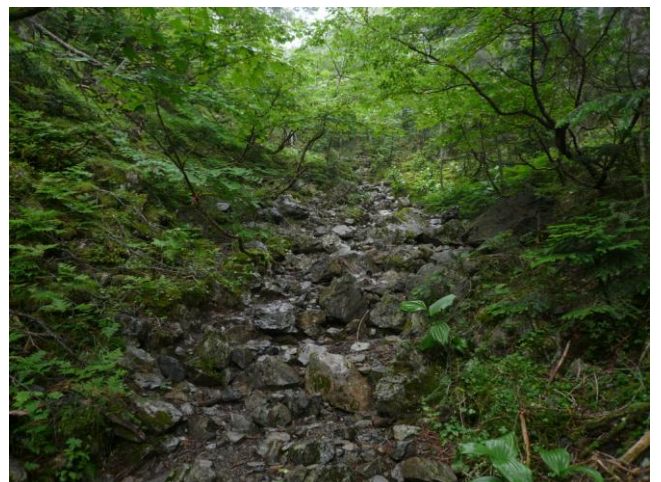


易老岳 (2354m)

易老岳からも、シダは少なくなったものの、見事な原生林が続く。幻想的な景色に見とれて足の止まることが多くなり、かなりペースダウン。この道は本当に気に入った。



三吉平というところから光岳への登りとなる。道は稜線をはずれ、涸れた沢の中を進む。やがて草原状になり、トリカブトのお花畑が広がる静高平に出た。数箇所ある水場はすべて涸れていた。



涸れた沢筋を歩く



トリカブトのお花畑



南限の生息域に住む雷鳥親子

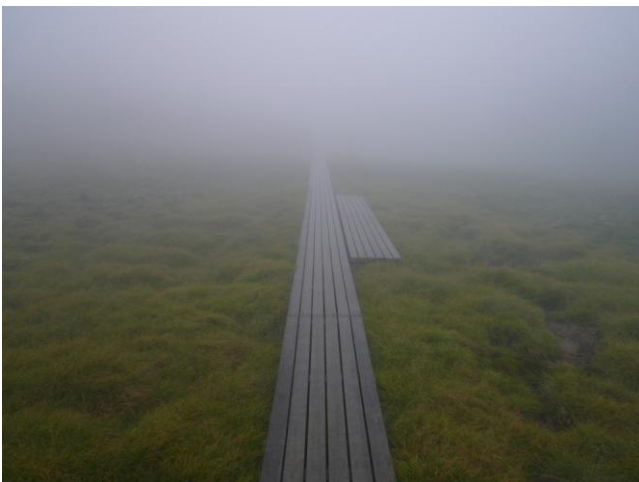


静高平



光小屋

光小屋が近づいて平坦になると、木道になる。途中で、雷鳥の親子に出会った。雷鳥が光岳に生息しているのは知らなかった。日本における南限地、つまり、全世界における雷鳥の生息南限地ということになるのだろうか。



光小屋付近の湿原

10時40分、予定よりもかなり早く、こぎれいな光小屋に到着。先にテントを張ってから光岳山頂を往復しようと、手続きをするために小屋に入ると、管理人の原田さんご夫妻が迎えてくれた。

行程についていろいろ聞かれ、北岳から縦走してきたこと、この日は聖平を3時半に出てきたこと、翌日は寸又峡に下る予定であることを説明した。そこで、赤石避難小屋で例の管理人さんに教わったコースについて聞いてみた。「藪がすごいし分かりにくいところも多いから、そんなに大きな荷物を担いで行くのはやめた方がいいよ。笹が枯れたなんて話、聞いたことないなあ。あの人がこのコース歩いたのはずいぶん昔じゃないの？」

やはり、私の予想通りだった。顔が赤かったし、目がとろんとして焦点が合っていなかったし、『夏子の酒』なんて本（帰宅して調べたらマンガだった）持っていたし（関係ないかな？）…。

今回は全く想定していなかったし、東京に連絡できないのでコースを変更するわけにもいかなないので寸又川林道を歩くことにしたが、今度このコースを歩こうと心に決めた。地図を見ると、北岳から光岳まで続く稜線は寸又峡までずっと続いており、歩いてみたい誘惑に強く駆られる。

寸又川林道を歩くということで、いろいろ情報を教えてくれた。原田さんご夫妻は、この小屋に出入りするときはいつも林道経由らしい。

この林道はよく崩壊するのだが、今年1か所大きく崩壊したということを、私も知っていた。以前は崩壊すると工事をして治していたのに、ここ数年、上流部分は放ったらかしらしい。その崩壊箇所も大きく崩れたままで、今まで通った人のトレースがついているもののちょっと怖いということだった。また、光岳から登山口までの山道の下り、そして寸又川の左岸の林道から右岸の林道に移る道が、太い獣道（鹿道）が多くて紛らわしく分かりにくいので注意が必要とのことだった。

（寸又川林道は川の左岸を通っていて、ものすごく曲がりくねって直線距離の倍以上の距離を歩かなければならないのだが、下流3分の1には右岸にも林道があり、こちらは比較的まっすぐで、左岸を通るよりも寸又峡まで1時間以上の短縮になるので、右岸を通る人が多いらしい。私も右岸を通って下るつもりだった。）寸又峡まで10～11時間、どんなに速くても8時間ということだった。

小屋のすぐ前にあるテン場に TENT を張ろうとしたが、雨が強くなってきたので、ザックを小屋の前において TENT を取り出し、テン場にもっていかうとした。その時、原田さんが中から出てきて、「時間が早いんだから、今日このまま下まで下っちゃいなよ。登山口のちょっと上流に、作業小屋があつて、誰でも使つていいことになってるんだ。そうしたら明日楽になるよ。」詳しく説明してもらうと、寸又川の登山口まで下り、寸又峡ではなく反対の上流方向へ5分ほど歩くと、3人泊まれる大きさのきれいな小屋があるらしい。

（作業小屋がたくさんあるのは知っていた）。登山口まで4時間で下れるから、時間的にも問題な

い。晴れる可能性があるなら光岳山頂で泊まってもいいが、天気はこれから悪くなる一方なので早く下った方がいいよ、と言う。

光岳山頂を往復したらゆっくりする気分になっていたの、即答できなかった。そこで、出した TENT はそのままにして、光岳山頂を往復する間に考えることにした。

10分で山頂に到着。樹林に囲まれた、特に特徴のない山頂だった。百名山に入っている理由を忘れたが（『日本百名山』は読んだことがあるのだが）、山域全体を見たら確かに魅力的かもしれない。



樹林におおわれた光岳山頂（2591m）

往復する間にいろいろ考えた末、このまま登山口まで下ることに決めた。翌日にここから下るとなると、行程がものすごく長いので2時には出発して真っ暗な中を歩かなければならない。そうすると、景色は全く楽しめなくなってしまう。ここはハイマツの南限地で生態学的にも貴重な場所なので、もったいないと思っていた。しかし、今からだと景色を十分に楽しむことができるし、翌日は林道歩きだけなので楽になる。

小屋に戻って、原田さん夫妻にこのまま下ることを告げた。テン場代を返してくれるというので、そのお金であんみつを買って食べながら世間話をしていたら、ご夫妻の家と、私の実家が隣町であることがわかった（お二人は、夏の3ヶ月間だけ小屋に入り、そのほかの期間は神奈川の自宅にいるそうである）。世の中、狭いものである。ロ

一カルな話題で盛り上がったが、あまりゆっくりしていると出発するのが嫌になるので、暇を告げて、正午かっきりに小屋を出発した。

山頂の方へ再び歩き、5分ほどで分岐に。そこを南（左）に曲がり、なだらかな尾根を下り始める。とたんに道が急に細くなり、獣道が交差するようになった。しばらく樹林帯をなだらかに下ると、ハイマツ帯の砂礫地に出た。濃霧で地形が分かりにくく、道を見つけるのに少し手間取ってしまった。どうやら、このあたりがハイマツの南限のようだった。道は再び樹林帯の中へ。ここも見事な原生林だった。



ハイマツの南限



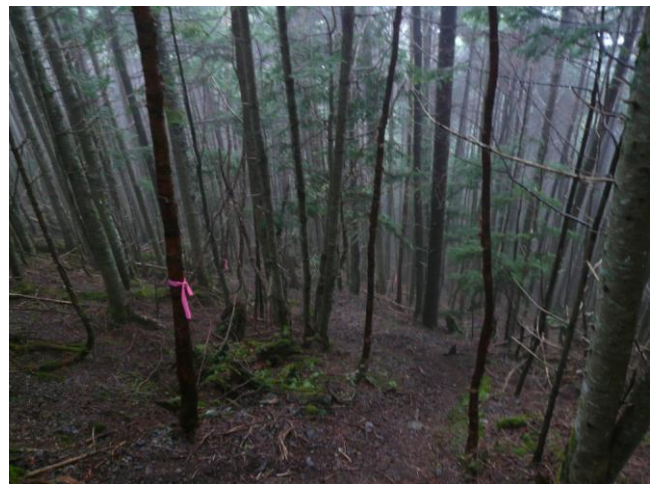
教えてもらった例の信濃俣・大根沢山への分岐となる百俣沢ノ頭までは歩きやすく、特に分かりにくいところはなかった。分岐を過ぎると傾斜の

きついところが多くなる。道がはっきりしなくなったが、印がしっかりとつけてあり、問題はなかった。標高 2000m地点までは順調で、この調子なら案外早く小屋につくのではないかと思い、ちょっと気がゆるんでしまった。

ダケカンバが多くなり、さらに下るときれいなカラマツの林となった。どうやら植林らしい。ずっと降ったり止んだりだったのが、下るうちにザーザー降りとなってきた。



百俣沢ノ頭。左へ行くと、信濃俣・大根沢山



急斜面を下る。(印のリボンが先まで見える)



カラマツの林

このあたりから、急坂になるのは等高線が混んでいる地図を見て分かっていた。しかし、実際にその急斜面にさしかかって、うんざりしてしまった。もともとざれていて滑りやすいのだが、さらに上に積もった落ち葉や石が濡れて滑るのである。斜面も、坂と言うよりも崖だった。バランスを取ってもそのまま滑ってしまう。北アルプス 2 回の縦走と、朝日で疲れのたまっていた膝に力が入らず、両手両足の指を全部合わせても全然足りないぐらい、何度も大きく滑って転んでしまった。(手がどろどろになってカメラを触るのが嫌だったので、写真を撮らなかったのは、後から考えると残念だった)。眼下に寸又川が見えるようになると、高度感もあって緊張しながらゆっくりと下った。そしてようやく、柴沢吊橋にたどり着いた。橋を渡ると立派な「光岳登山口つり橋」の標識が。「寸又峡温泉まで 39・9 k m」という表示があった。「例の」寸又川林道に出たのだ。標高 2000 m 地点から 1 時間半の予定が 2 時間以上かかってしまった。原田さんのアドバイスに従って、この日光岳から下ってよかった。膝ががくがくで、こんな状態では 40 k m 弱の寸又川林道を続けて歩くのは難儀だっただろう。それに、暗かったらあの急坂はもっと時間がかかったに違いない。

橋から林道を上流方向へ進むと、すぐに小さな小屋が現れた。中には畳が敷いてあり、机もあって快適だった。なによりも、聖平で乾いたテントを濡らさなくて済むのはありがたかった。靴と靴

下はとっくに再びびしょびしょになっていたが。びしょぬれになった服を吊るし、食事を済ませ、早々に寝袋にもぐった。



柴沢吊橋



光岳登山口



柴沢小屋

8日目 8月24日(日)

柴沢小屋 5:10 — 柴沢吊橋 5:20 — 6:10 大崩壊地 —
7:10 一軒目の小屋 — 7:40 大根沢橋(崩壊地) — 7:50 小さな小屋 —
8:00 バイク — 8:10 「寸又峡温泉まで 28.4km」の標識 — 8:30 二件目の小屋 —
9:00 大きな作業場と倉庫 — 9:10 小根沢橋 — 10:30 三件目の小屋 —
11:20 展望台・ヘリポート(お立ち台) 11:50 — (千頭ダムへの道(右岸林道への道)を探して、ここから3時間ほどロス。詳細は、 — 12:20 日向林道 — 道を探して行ったり来たり — 14:20 日向林道に戻った — 14:50 寸又川左岸林道に戻った) — 15:50 上閑蔵沢 — 16:50 朝日岳登山口 — 17:00 吊橋 —
17:20 寸又峡温泉バス停(17:50 — (バス) — 18:30 大井川鉄道・千頭駅 18:53 —
20:06 JR 金谷駅 — 熱海駅構内泊(大雨で電車が止まった) — 25 日昼過ぎ帰宅)

(歩行時間: 11 時間 40 分、

寸又川左岸林道(光岳登山口→寸又峡温泉)の所要時間は 9 時間弱)



前夜ずっと雨が降っていたのだが、小屋の屋根がトタンなため大きな音がする。林道の崩れた箇所が、大雨だとさらに崩れて危険な状態になるかもしれないと心配で、なかなか寝付けなかった。時折雨が強くなると、トタンに雨の激しく打ちつける音で土砂降りなのではないかと思ってしまったが、外に出るとそれほどの雨でもなかった。崩れたところまで行ってみて、少しでも危険を感じたら無理をせず、2 日余裕があるので引き返して光岳まで登り、易老渡からエスケープしようと腹を決めたら、後は熟睡だった。

明るくなって出発したかったので、4 時起床。5 時 10 分に出発。雲が厚いためか外はまだ暗い。雨がパラパラと降っている。

林道といっても、あちこちで崩れた岩が転がっていて、山道のようなところがある。小屋を出てすぐ、大きな岩がたくさん転がっているところにつまづいてしまった。

小屋から 2 km ほどは、林道は川の右岸、水面から 10m ほどの高さのところを走っているが、橋を渡って左岸に移ると、谷は急に深さを増して川面がはるか下の方へ離れてしまい、林道は高度感を増す。岩が崩れているところはたくさんあったが、特に危険を感じることはなかった。大きく崩壊したところは、光小屋のご主人の話では吊橋(光岳登山口)から 1 時間半ほどのところということだった。

登山口から 50 分進んだとき、前が大きく崩壊して林道が 100m ほどふさがっているところにつかかった。最初は大きめの岩が積もっていて、崩れる様子もなく、歩きやすかったが、少し進むと幅 20m ほどにわたって 100m ほど下の川面まで崩れてざれになっているところがあった。遠くか

ら見たときはちょっと怖かったが、近づくトレースがはっきりついていて、しばらく観察してみたが崩れる様子もなく、思ったほどのことはなかったが、単独行だし、ここは年に数えるほどのパーティーしか通らないようなので何かあったら大変と、とにかく慎重に進んだ。(この後にもそこそこ大きく崩れているところがあったが、やはりここが一番崩れ方が大きかったのも、今年崩れた場所というのはこのことだろう)。しかし、私が下山してから東海地方は豪雨が続いたので、タイミングが数日遅かったら危なくて渡れなかったかもしれない。



大崩壊地

その後も、岩の転がっている道を歩く。絶えず神経をとがらせて、左手の斜面からの落石には注意して歩かなければならない。林道なのに 40km 弱で 12 時間もかかるという設定になっているのは、長くて疲れるというのもあるのだろうが、このように歩きにくいということもあるのだろう。



光小屋の原田さんの話では、林道には快適に泊まれる小屋が 3 軒あるということだった。出発 2 時間後に、その 1 軒目に到着。中をのぞいてみると、寝袋が 2 つあり、荷物が散らかっていた。おそらく釣り師なのだろう。原田さんは、私が寸又峡まで歩いている間、たぶん人には会わないだろう、もし会うとしたら釣り師だけだろう、と言っていた。前夜泊まった柴沢小屋とほとんど同じ大きさ、同じ造りだった。



一軒目の小屋

相変わらず雨はぱらぱら降っていて、霧に覆われて眺めはなかったが、時折雲が切れて、谷の向こうに雲をまとった黒々とした深南部の山が姿を見せ、水墨画のような景色だった。



2時間半で、大根沢橋に。橋の向こうが大きく崩れていた。しかしここは歩きやすかった。原田さんの話では、ここでザックを下の谷に落とした人があるらしい。(どうやったらザックだけ落ちるのかよく分からないが…)

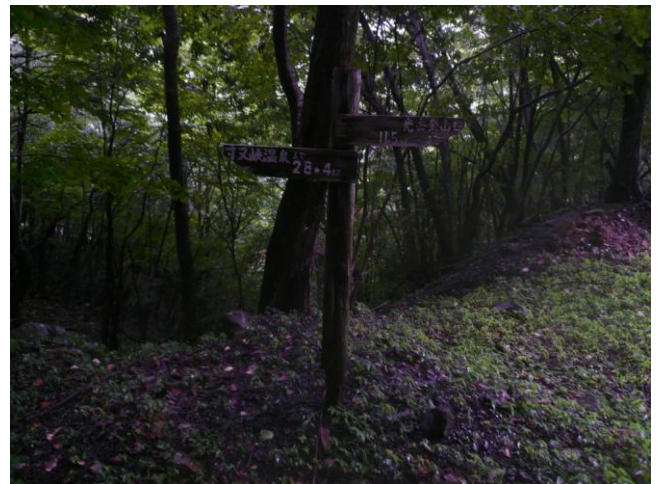


大根沢橋の崩壊地

そして、10分ほど進むと、2台のミニバイクが置いてあった。おそらく、先ほどの小屋に泊まった2人連れのものだろう。ここまでバイクで入って来られるということは、ここから先は大きく崩れているところはないのだろうと、少しほっとした気分になった。



出発後3時間で、「寸又峡温泉まで 28.4 km」の標識。登山口の「寸又峡温泉まで 39.9 km」の法事が正しいのであれば、ペースが遅い。少しスピードを上げることにした。



出発から3時間20分で、2つ目の作業小屋。ここも中の作りは一緒だった。そこから30分ほど進むと、大きな作業用の小屋があったが、中は散乱していて、今は使っていないようである。さらに10分歩き、出発から4時間で小根沢橋に。このあたりから、雨が強くなる。足元に、見たこともないほど長〜いミミズがいた。(さすが深南部!?) 40cmほどあるだろうか。写真を撮ろうと思って、ものさし代わりに足を横に置いたら、びっくりして10cmも縮んでしまった。



二軒目の小屋



長〜いミミズ。足を横に置いたら、びっくりして10cmほど縮んでしまった。

ガスがかかって、相変わらず谷の景色はあまり見えない。小根沢、大根沢と、沢が土地を大きく削り取って流れており、林道は等高線にそって走っているので沢を横切るのに直線距離の何倍も

の距離を横切らなければならない。晴れていると対岸の道がすぐ目の前にあるのに大きく迂回しなければならないので嫌になると言う人がいるようだが、ガスで対岸がよく見えず、苦にはなかった。というよりも、それだけ林道が曲がりくねっているということは、それだけ谷が深いことを意味しているのだから、かえって山深いところを歩いている実感がして気分がよかった。単調な道を長時間歩いて、すでに足はくたびれ始めていたが。

出発から5時間20分で、3軒目の小屋に。ここは少し広かった。今年のカレンダーまでかかっていた。林道の工事に入る人たちが使っているのだろうか。



三軒目の小屋

やがて雨は止み、雲をまとった寸又川の対岸の山々が姿を現した。まさに深山幽谷、仙人でも住んでいそうな感じだった。深南部に対するあこがれのような気持ちはますます高まった。





やがて、この日の最大のポイント、展望台に到着。出発から 6 時間 10 分だった。ここから寸又峡温泉まで、そのまま左岸を歩けば 4 時間半、川を渡って右岸を歩けば 3 時間弱なので、悪くないペースだ。もちろん、右岸を通るつもりである。

周辺の山々の景色がよかったので、出発してから初めてまともに休憩を取った。きれいなトイレがあったが、水は出なかった。



展望台（お立ち台）・ヘリポート

右岸に渡るには、千頭ダムまでここから急斜面を下らなければならないのだが、下り口がよく分からない。すこし進むと、ちょっと太めの樹に赤ペンキで矢印が書いてあった。昨日の光岳からの下りの最後の斜面ほどではなかったが、ここも傾斜がきつかった。道はないといってよく、樹につけてあるペンキのマークが頼りだったが、マークは分かりやすく、迷うことはなかった。ここはシカが多いらしく、太い獣道（鹿道）が入り乱れて

いた。

急斜面をどんどん下り、ちょっと崩れたところを下りると、林道（日向林道）に降り立った。この林道を上流の方へ向かって進むと、テレビ（ザ・ベストハウス 123）で渡るのが日本一怖い橋として紹介された夢想吊橋に行けるらしい。林道から下りてきたところを見上げると、白いペンキで目立つようにたくさん印がつけているので、これなら下から登ってきても取り付きが分からなくなることはない。面白いことに、この林道から下の林ではセミがたくさん鳴いていたが、林道の上の林では全く鳴いていなかった。

寸又川左岸林道から 200m の標高差を下って来たのだが、この林道から千頭ダムまでさらに 300 m ほど急斜面を下らなければならない。しかし、取り付きが良く分からない。日向林道から登る道にはあれだけはっきりと印がつけてあるのだから、下りも目立つ印がつけてあるはずだ、という勝手な思い込みがまずかったのだ。地図をよく見て、地形から判断して探すと、小さな石に赤ペンキで矢印が書いてあった。よく見ないとペンキがどうかははっきり分かりにくいほど変色していた。道ははっきりしないのだが、やや下るとマークが現れたので、千頭ダムに下るルートで間違いないのだろうと思い、先へ進んだ。急斜面をちょっと下ると、小さな一軒家の廃屋のようなものが現れた。石垣が何列にも積んである。樹林に囲まれて薄暗い。こんなところに人が住んでいたのだろうか？（手袋がどろどろになったし、急斜面なのでカメラを出すのが面倒で、写真は撮らなかった。）

マークはここで消えてしまった。樹林のせいで、ダムが見えないどころか、地形も分からない。斜面に手をつかなければならないほどの急斜面が続いている。様子見で少し下ってみるが、マークは全然現れない。獣道はたくさんついているが、トレースらしきものは全く見つからない。これは道を間違えたのかもしれないと思い、林道まで引き返して、もう一度地図で確認したが、やはり他には考えられない。林道をちょっと歩くと千頭ダムの見えるところがあったので、コンパスで位置

を確認したが、やはり先ほど下りた道で間違えなさそうだった。きっと印を見落としたのだろうと、もう一度先ほどの道を下って行った。ちょっと先まで急斜面を下りてみたが、やはりよく分からない。光小屋の原田さんは、「鹿道に気をつければ大丈夫だよ。それほど分かりにくいところはないよ。」と軽く言っていたので、日向林道の登り口のはっきりしたマークと併せて、しっかりした印がダムまでちゃんとついていくという先入観の塊になっていたのが失敗だった。また、寸又川林道は一般道の感覚でいたのも失敗だった。完全に情報収集不足だった。帰宅してネットで調べたら、やはりコースはあったようだ。ダムから日向林道まではかなりの藪で、印がほとんどついていないのだ。やはり、ここは深南部なのだ。

さらに良くないことに、道が分からなければ、ちょっと時間は余分にかかるけど左岸林道で下ればいいやと、ちょっと安易な気持ちも心のどこかにあった。だから、ザックを置いてもう少しルートをしっかり探すべきだという心の声はあったが、急斜面を馬鹿みたいに重いザックを背負ってうろうろして大汗をかいてへばってしまったのもあって、ルートを探すのをあきらめ、引き返して左岸林道を進むことにした。

敗北したような気分で日向林道に戻ったら、左手の薬指にヒルがついているのに気づいた。思わず右手で払ってしまったのが失敗だった。すでに食いつかれた後で、ヒルの口が残ってしまい、血が止まらなかった。ヒルにやられたときのために、マッチをすぐに出るところに入れておいたのに…。

もしやと思って足元を見ると、レインウェアに何匹もヒルがたかっている。ザックを下ろしたら、ザックにも。帽子を取ったら、帽子にも…。

スパッツを外し、レインウェアを脱ぎ、くっついていたヒルを取り除いた。しぶとい奴が多いので、マッチを出して火をつけて炙ると簡単に落ちてくれた。

すでに、日向林道から左岸林道まで急斜面を登り返す気力は完全に失せていた。距離的には相当

の遠回りになって時間もかかるが、日向林道をそのまま登って左岸林道に合流することにした。



日向林道・千頭ダムへの下り口



下って来た道を日向林道から見上げたところ。白いペンキのマークがたくさん付いている。



千頭ダム



ひっついて離れないヒル

うねうねと日向林道を辿り、14時50分、左岸林道に合流。結局、3時間もロスしてしまった。

このあたりから道はよく整備されていて、林道らしくなったが、登山靴では歩きにくい。平坦な道を同じ姿勢で歩き続けるので足への負担が大きく、ザックの重みが1歩1歩衝撃となって脚にかかる。

後ろから、エンジンの音が近づいてきた。止めてあった2台のバイクだった。やはり釣り師のようだ。あっという間に追い抜かれ、エンジンの音は遠ざかってすぐに聞こえなくなってしまった。

左岸林道は、寸又川に流れ込んでいるさらに3つの沢を超えるのに大きく遠回りをしている。ガスが消えて見通しが良くなり、沢の対岸が見えるようになった。寸又川流域の山の深さがよくわかる。山の斜面が林道のあたりから崩れているところが多かった。林道を作ったために崩れやすくなったのだろう。こんな林道に、かつて光岳登山口までバスを走らせようという計画があったらしい。



きれいな林道



上関蔵沢をはさんで対岸の林道を見る。

1週間の縦走と朝からの林道歩きで、足の裏はマメだらけだったが、このきれいな林道を歩いていて、マメがどんどんつぶれ出した。止まると動き出しが辛いので、休まずに歩く。ゆっくり歩いても速く歩いても痛いのは同じと、スピードを上げて歩いたら、かなりいいペースになってきた。この日は寸又峡からの最終バスには到底間に合わないだろうと、寸又峡温泉で1泊するつもりになっていたが、このペースだとバスに間に合うかもしれない。あと少しで、寸又川を渡る朝日岳登山口に着こうかというとき、林道の左の崖から、大きな動物が飛び降りてきた。カモシカだ！

こちらをじっと見つめて動かない。ちょっと前に進むと、カモシカも少し動くが、またこちらをじっと見つめる。写真をアップで撮りたいと思ってさらに近づいたら、一声、奇妙な声をあげて林道から右手の崖に飛び込んだ。ごろごろがらがら

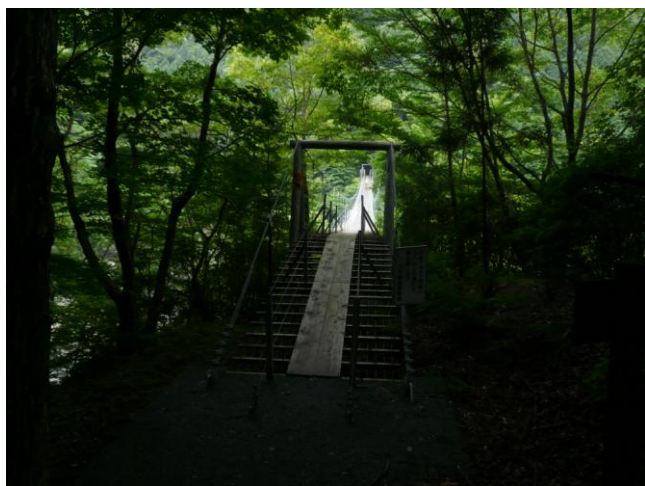
崩れ落ちるすごい音がした。急いでカモシカの飛び降りたところに行ってみたが、カモシカの姿はすでになく、下まで 100m 以上崩れているのではないかとと思われるようなものすごいガレ場から土煙が立っていた。まだ、ガラガラと崩れていた。

私はこれまでまだ 1 回しかカモシカを見たことがなかったので、山に行くときはカモシカに出会うことを期待しているのだが、いつも空振りだった。だから、今回は本当にうれしかった。このあたりはカモシカが多いらしく、寸又峡温泉のシンボルともなっているようである。

カモシカとの遭遇にすっかり気をよくして、先へ進むと程なく朝日岳登山口の標識が。最終バスまで、まだ 1 時間ある。3 時間半のコースが 2 時間だった。ここから山道を少し下ると、すぐに立派なつり橋が現れた。寸又川の水量はそれほど多くないが、茶色く濁っていた。



こちらをじっと見つめるカモシカ



寸又川を渡る吊橋



寸又川

吊橋を渡ってちょっと登ると、林道に出た。やがて人家が見え出し、出発から 12 時間 10 分の 5 時 20 分、寸又峡温泉の町に到着。5 時 50 分最終バスに間に合った。

広河原から入り、北岳、間ノ岳、塩見岳、荒川岳、赤石岳、聖岳、光岳と 8 日間続いた縦走はこうして終わった。1 泊して温泉に入ってゆっくりしたい気持ちもあったが、この日のうちに家に帰ることにした。1 週間も風呂に入っていなかったので、バス停前のトイレの水道でタオルを洗い、体を拭いて、服を着替えていたのだが、そのときに、靴についてきたヒルを 2 匹発見。もしかしたらまだザックなどにくっついていていいるかもしれないと思い、丹念に探したが、見つからなかった。雨のせいか、日曜だからか、人影はあまり見当たらなかった。腹が減ったので食糧が欲しくて店を探したが、すべてしまっている。



寸又峡温泉の入口（出口？）



ここは深南部の山々への登り口

最終バスで千頭駅に出たが、ここもすべて店は閉まっていた。大井川鉄道で東海道線の金谷駅に出た。どうやら新幹線が止まっているらしい。私は鈍行で帰るので、気にせず電車に乗った。しかし、沼津を過ぎたら急にのろのろ走るようになり、

熱海から先、大雨のせいで電車が動いていないという放送があった。

熱海で電車を降りると、帰れなくなった観光客などであふれていた。とにかく腹が減ったので、開いていたマクドナルドに入り、ハンバーガーをいくつか注文した。ハンバーガーにかぶりついてみると、首筋がもぞもぞする。手で触ったら、ヒルが手にくっついてきた。すぐ横では、きれいな格好をした若い女の子たちが楽しそうにおしゃべりをしている。悲鳴が上がらなかったところを見ると、どうやら見られなかったらしい。あわててヒルをハンバーガーの入っていた箱の中に閉じ込めた。開けてみると、ヒルは小さくなってじっとしていた。

もしかしたらまだ体にヒルがついているかもしれないと、落ち着かない気持ちになったので急いで残りを食べて、店を出た。こんなところまでヒルを連れて来たということに、すこし後ろめたさを感じた。

電車の動く見込みはまったくないということで、駅の通路にシートが敷かれ、毛布が配られていたが、すでに人でいっぱいになり、開いている場所にはなかった。仕方がないのでホームに止まっていた電車で一夜をすごした。JRからは弁当の差し入れまであった。

翌朝、新幹線が動き出したので小田原まで新幹線で振り替え輸送となり、翌 25 日の昼過ぎ、ようやく帰宅となった。

この縦走では、熊ノ平から塩見岳を超えて三伏峠まで移動した日は1日中濃霧と強風で天候に恵まれなかったが、聖岳までは、日本のあちこちで大雨だったにも関わらず比較的天候に恵まれた。最後の2日は、ほどほどの雨のおかげで深南部らしい雰囲気をつくり味わうことができたし、気温も上がらず林道歩きにはよかった（かんかん照りであの林道を歩くのは厳しいだろう）。縦走から帰った後、南アもしばらく大雨や雷で大荒れの天気が続いたようである。